

【報告】

ハーンの伝記記述と英国支配下のイオニア諸島※

長岡 真吾（島根大学）

1 「ギリシア」再考

ラフカディオ・ハーン（Lafcadio Hearn、小泉八雲 1850-1904）について、多くの辞典や文献はその出身国をギリシアと記している。『広辞苑 第六版』（2008）はハーンを「ギリシア生まれのイギリス人」とし、『デジタル版 集英社世界文学大事典』（1996, 2014）では「ギリシアのレフカス島生まれ」と明記している。『ラフカディオ・ハーン・コンパニオン』（2002）の冒頭も、ハーンはギリシアで生まれ、アイルランド・フランス・英国で教育を受けたと記している。

しかし、歴史的事実だけを述べるならば、ハーンが生まれたのは「ギリシア」という名称の国ではない。1850年6月27日にハーンが生まれた場所は、当時サンタ・マウラともレフカスとも呼ばれ、現在では一般にレフカダと呼ばれているイオニア海の島である。この島が属していた「国」は「イオニア諸島合衆国（The United States of the Ionian Islands）」という英語の正式名称を持つ「独立国」であった。この国の成立は1815年の第二次パリ条約によってイオニア諸島の統治がフランスから大英帝国に移ったことによる。その結果、イオニア諸島は英国の被保護国となり、事実上の植民地となるのである。

こうした史実を踏まえれば、ラフカディオ・ハーンの出身が「ギリシア」と無条件に記されていることには素朴な疑問が生じる。近代国家としての「ギリシア」は1832年に「ギリシア王国」として成立するが、それ以前はオスマン帝国やビザンティン帝国、ローマ帝国など二千年以上にわたって異民族の支配下にあった。国としての「ギリシア」は歴史のなかでは不在であり続けたのである。

イオニア諸島も同様に被支配の長い歴史を持ち、ギリシア地域とは別の歴史的経緯を辿る。ここでは英国支配下にあったケルキラ／コルフ、パクシ、レフカダ／サンタ・マウラ、イタケー／イタカ、ケファリニア／セファロニア、ザキントス／ザンテ、そしてキティラ／チェリゴの七島をイオニア諸島と前提するが、これらの島もビザンティン帝国などの支配を経て、15世紀からは四百年以上にわたってヴェネツィアの領土となり、本土のギリシア地域とは異なる政治・文化の影響下に置かれていく。18世紀末にフランスとオスマン帝国およびロシアが名目上の統治国となる時期があり、その後に大英帝国の被保護国となる。そのような支配・被支配の状況のなかで後にラフカディオ・ハーンの父親となる男性が島に配属され、後に母親となる女性と出会うのである。しかもその男性は1801年に英国に合併されたアイルランドの出身である。よってハーンの洗礼名であるパトリック・ラフカディオは、その名が示唆するとおり、大英帝国とその支配下にある二つの国という歴史的経緯がなければ誕生しえなかった、いわば「帝国の息子」とも呼べる背景を持っている。

よって、ハーンの出身が「ギリシア」であるという記述は、大英帝国の支配という歴史を見えにくくし、パトリック・ラフカディオの出生が持つコロニアルな文脈を消去してしまう危険をはらんでいる。大英帝国とその支配下にあるイオニアの島という政治状況の下、言語や宗教、習慣などが大きく異なる二人の男女が巡りあってパトリック・ラフカディオを誕生させるわけだが、両親となるこの二人についてはハーンの伝記作家たちの記述にそのまま依拠してきた傾向が強く、その記述自体の分析は十分になされてきたとはいえない部分がある。ハーンの両親に関する伝記記述を帝国という歴史文脈から再検証していくことには一定の意義があると思われる。

2 イオニアの娘と大英帝国陸軍将校

ハーンの母となるローザ・アントニア・カシマチ（1823-1882）と父となるチャールズ・ブッシュ・ハーン（1819-1866）が出会うのは 1848 年、ローザの故郷であるキティラ／チェリゴ島でのことである（以下当時の英国の呼び名にしたがってチェリゴとする。他の島についても同様）。チャールズは英国の属国であったアイルランドに生まれ、代々にわたって高い社会的地位を維持してきたアングロ・アイリッシュの家系に育ち、1842 年にアイルランドの王立外科医学院を出て、1844 年より軍医補として長期の海外勤務を開始する。1846 年からイオニア諸島に配属され、ザンテ、イタカ、コルフの各島を経て 1848 年 4 月からチェリゴ島に駐屯する。ローザは、ギリシア本国の独立戦争が開始されてから二年後に、「イオニアの高貴な社会的地位を継承」（フロスト 翻訳 6）するアントニオス・カシマチを父としてチェリゴ島に生まれる。30 歳のチャールズと出会ったときのローザは 25 歳であったという。

O・W・フロストの伝記（1958）によれば、ローザの両親や兄のディミトリオスはこの二人の交際に反対した。しかしローザの妊娠が発覚するに至って兄のディミトリオスは激高し、「英国人軍医を待ち伏せし、刃で何度も刺して妹の受けた不名誉への報復をした」（翻訳 8）とされている。それを聞いたローザは「たぶん家を飛び出し、傷ついた愛する人を見つけ、引きずって洞窟に入れ、健康を取り戻すまで介護した」（同）と伝えられている。

報復のためにチャールズがローザの兄に襲撃されたというこの挿話は、フロストのみではなく他の伝記作家らも一様に取り入れている。フロストはこの箇所に注釈を付けて、「スピロス・スタイスによれば、この出来事は作り話 [fictitious] だと言う」（同）としながらも、この出来事に言及する次の三つの出典を挙げている。1）ハーンが弟のジェイムズに宛てて書いた 1890 年 1 月 6 日付の手紙、2）1906 年出版のエリザベス・ビスランドの伝記中の記述、3）米国の文芸誌『ブックマン』（*The Bookman*）（1904 年 12 月号 [sic]）191 頁に掲載されたハーン追悼記事、である。この事件の記述がどのような問題を孕んでいるかについては後述するが、大英帝国統治下のイオニアの島でこの襲撃事件は実際にあったのであろうか、それとも「作り話」なのだろうか。三つの出典の記述を確認し、比較してみたい。

まず、ハーン自身はこの出来事を「わたしの父は母の兄に襲われて、刃物でひどく刺され、死んだと見なされて放置された。父は回復し、部隊が移動の命令を受けたときに母を連れて島を離れ駆け落ちしたのだ」（Kneeland）と簡潔に記述している。

ハーンの米国時代の同僚でもあったエリザベス・ビスランドの伝記中の記述では、いくつかのことがあらたに加わっている。フロストやハーンとの主たる違いは、チャールズを襲撃した兄弟の数が一人ではなく複数いたとしていること、刺されたチャールズを隠したのが洞窟ではなく納屋となっていること、そしてローザには従者がいてその助けを借りたこと、看病から結婚までがローザを主語に語られていること、などである。

ハーン逝去の二ヶ月あまり後に発行された『ブックマン』1904年11月号（フロストの12月号という記述は誤り）の追悼記事では、後半にこの襲撃事件が特筆されている。そこではこの事件は「冒険物語風の話」とされて、チャールズが刺された回数や、ローザによる洞窟での看病の期間など、さらにいくつかの細部が加えられている。また、ハーンの出生場所やその経緯について明らかに誤った情報もある。

この「冒険物語風の話」はフロスト以降の伝記作家においてもそれぞれに微妙な展開を見せながら引き継がれていく。顕著な例はジョナサン・コットの『さまよう魂』（1991）である。コットはチャールズが島で医療行為をしていたことや、事件の知らせを受けたローザの反応について劇画的ともいえる細部を追加している。しかし、それらの根拠となる出典は示されていない。

3 語られるイオニア、語るイオニア

チャールズ襲撃事件の挿話は、このようにいわば尾鰭のごとき一定の誇張や脚色とともに繰り返し語られてきた側面がある。それらの記述が一体どの程度「事実」であったのかを確かめることは可能だろうか。この挿話の出典を辿れば、ひとまずハーンが弟に宛てて書いた手紙の内容に行き着くが、その内容はハーン本人が直接見聞きしたものではありえず、一定の年齢に成長した後に誰か他の人々から聞かされたもののはずである。また、ハーン自身がその話を「冒険物語風」に特に脚色したというような痕跡は見つけられない。

この挿話が繰り返し扱われることになった経緯については、ニーナ・ケナードによる伝記（1911）が一定の示唆を与えている。ケナードの記述で注目すべき点の一つは、チャールズ襲撃の話がアイルランドの親族のあいだで語られていたという指摘である。チャールズとローザのことをアイルランドの親族たちは繰り返し噂していた可能性が高い。もう一つは、ケナードがこの挿話を伝説すなわち作り話であるとほぼ断定し、代わりにイオニア諸島の女性の地位や結婚持参金の因習など現実の社会背景を推定していることである。

では、当時のイオニア諸島の社会状況からこの襲撃事件の真偽について考えることは可能であろうか。英国支配下のイオニア諸島の社会については、トーマス・W・ギャラントの『統治を体験する―英国支配の地中海における文化、アイデンティティ、権力』（2002）に今回の問題と密接に関わる報告がある。ギャラントは、当時のイオニア社会における殺傷事件を数多く分析し、代表的な事例を紹介しながら、イオニアの男たちの争い方には一定のルールがあったことも明らかにしている。そして、殺傷事件には大きく分けて二種類があったとする。言葉による名誉毀損を原因とする

決闘型と、なんらかの行為によって一族の名誉が傷つけられた場合の報復型である。前者の決闘型の争いについて当時の共同体内部で共有されていた認識をまとめると、次のように要約できる。1) イオニア社会では名誉・体面を極めて重視し、侮辱された場合は即座に双方がナイフを抜いて決闘をする。2) ナイフを使う争いでは相手に不名誉な傷を負わせることが重要で、相手の命を奪うことは目的ではない。3) 勝者は法と裁判に従い、自分の言い分を法廷／公衆の面前で堂々と述べ、名誉と体面を保つ。これらの認識は同じイオニア諸島民には当然のこととして前提されていたが、一方が他の地域／国の出身である場合は、ナイフではなく殴り合いなどになることが多かった。

報復型の殺傷事件は、名誉や体面が傷つけられたことに起因する点で決闘型と共通するが、実際の行動形式や社会における共通認識は大きく異なる。ギャラントはその特徴を八点に要約しているが、それらと照らし合わせた場合、チャールズ襲撃事件は、もし実際にあったとするならば決闘型ではなく報復型として行われたと断定できる。ローザの兄ディミトリオス（ら）がチャールズを待ち伏せして襲ったという伝記記述を信頼するならば、そのような不意打ちが許容されるのは報復型でなければならない。しかし、手段や結果に関してはいくつかの点で疑問が残る。傷が目的である決闘型とは異なり、報復型はあくまで殺害が目的であって、事例に照らしても報復型の加害者には躊躇や容赦がない。チャールズが本当に複数回刺されたとすれば死を免れることは不可能であったと考えるほうが自然である。また、当時の共同体においては、報復行為自体は正義とみなされたものの、加害者は、もし捕らえられた場合には法の裁きを免れない。英国将校が襲撃され瀕死の重症を負ったとなれば当局の犯人捜索や逮捕・裁判か、あるいは犯人の逃亡がその後に起こったはずであるが、その点は何も語られてはいない。また、襲撃の動機についても疑問を抱かざるをえない部分がある。ギャラントによれば当時のイオニア社会では男女それぞれの活動領域で体面と倫理規範が極めて重視されていた。そして行動の倫理規範の境界を決定していたのはゴシップであった。そのような社会において、ローザまたはカシマチ家の名誉が損なわれるのは、チャールズが規範を外れる形でローザとの関係を一方的に絶った場合か、またはローザの行動に対して共同体の人間からなんらかの中傷が行われた場合であると考えられる。しかし、前者の場合では、チャールズ襲撃の知らせを聞いてローザが驚いて助けに駆けつけると記述されていることから、「報復」が必ずしも家族内で合意されていなかった可能性が指摘できる。加えて、当時の事例と比較する限りではローザの妊娠が発覚したことだけが報復／襲撃の理由になったとは考えにくい。後者の場合では、同様の事例に照らした場合、ディミトリオスが敵対すべきはローザを中傷する言葉を発した人物または人々のほうであって、チャールズではない。むしろチャールズ自身も中傷される側に含まれていたはずである。

このようにチャールズ襲撃は報復型の形式を取りながらも、その信憑性には合理的な疑いが残る。したがって、ケナードやチェリゴ島出身のスピロス・スタイスが述べるように、この事件が少なくとも言葉通りのものとして実際に起きた可能性は極めて低いと考えるほうが、当時のイオニアの社会状況に合致するように思われる。にもかかわらず、なぜこの「伝説」は繰り返し伝記のなかで語られてきたのか。

4 「地中海のアイランド人」

ギャラントは英国支配下のイオニア諸島の社会や人々について、当時の英国がどのようにそれを伝えてきたかを総括している。それによれば英国人は主として二つの相反する方向性をもつイメージを「イオニア諸島のギリシア人」に与えていたという。一つは古代ギリシアの末裔という「高貴なオリエント人」という肯定的イメージ、もう一つは文明化されていない粗野で野蛮な「ヨーロッパのアボリジニ」という否定的イメージである。さらにその過程においては、英国がアイランド人に対して作り上げてきた否定的ステレオタイプを、イオニア諸島民にそのまま当てはめて「地中海のアイランド人」と見なす記述が多く認められるようになったのだという。すなわち、アイランド人と「同様に」、「感情を爆発させやすく、酒に溺れやすく、すぐに暴力に訴える」や、「狡猾で二枚舌を使う」などのイメージが共有されていくのである。

こうした文脈を踏まえるならば、ハーンの伝記記述ではフロストがチャールズ襲撃の「伝説」を述べる際に 1821 年 9 月 26 日にチェリゴ島で起こったトルコ人殺戮事件に同時に言及している点に注目すべきである。ギリシア独立戦争の勃発を受けて、英国政府の保護を求めてチェリゴ島に船で逃げてきた 41 名（40 名という資料もあり）からなるトルコ人の一団を、島民の男たちが虐殺したのである。フロストは、船は嵐によって流れ着いたとし、この事件をその後の英国の戒厳令と島民への締め付けという文脈で引き合いにだしているが、英国では異なった報道がなされている。当時の『タイムズ』紙では、「水を求めて接岸したトルコ人たちを島民が岸边におびき寄せて一人ずつ射殺し、子どもを親の死体に結びつけて海に投げ込んだ。英国軍が到着して阻止する前のことである」と伝えている。この事件を重視した英国側は、安定した支配と治安維持のために戒厳令を布告し、事件に関わった 5 名を処刑した。そしてチェリゴ全島で武器を没収し、従わない場合は厳罰に処した。この事件は英国本国に継続的な衝撃を与えたと推測される。事件から 40 年を経て出版されたホワイト・ジャーヴィス著『今世紀のイオニア諸島』(*The Ionian Islands during the Present Century*) でもこの事件が取り上げられている。チャールズがチェリゴ島への赴任をアングロ・アイリッシュの実家に伝えていたとすれば、このトルコ人殺戮事件を思い出したのは、むしろチャールズの家族たちのほうではなかっただろうか。前述したイオニア諸島民への否定的ステレオタイプやトルコ人殺戮のイメージを背景として、チャールズが残虐なイオニア島民の暴力を生き延びたという「冒険物語風の話」がアイランドの実家や英米のメディア、そして伝記作家らによって形成・維持されていったと考えることには、一定の可能性があるとと思われる。さらに、ローザが幼いパトリック・ラフカディオを連れてアイランドに到着したときに、大英帝国側はどのような既存の文脈とともに彼女らを迎え入れたのか、ということも問題になりうる。大英帝国とイオニア諸島との関係が、ハーン家とローザとの関係にどの程度影を投げかけていたのか、これについて述べた伝記はまだ書かれていない。

※本報告は、春風社より 2016 年刊行予定の江藤秀一編『帝国と文化』（仮題）に収録予定の拙論「大英帝国とラフカディオ・ハーンの伝記記述」からの抜粋と要約である。

主な引用文献（翻訳が記されていない文献からの引用は長岡訳）

- Bisland, Elizabeth. *The Life and Letters of Lafcadio Hearn, Volume I*. Boston: Houghton, Mifflin and Co., 1906. PDF file.
- Cott, Jonathan. *Wandering Ghost: the Odyssey of Lafcadio Hearn*. New York: Alfred A. Knopf, 1991. Print. （ジョナサン・コット『さまよう魂』真崎義博訳、文藝春秋、一九九四年）
- Frost, O. W. *Young Hearn*. Tokyo: The Hokuseido P, 1958. Print. （O・W・フロスト『若き日のラフカディオ・ハーン』西村六郎訳、みすず書房、二〇〇三年）
- Gallant, Thomas W. *Experiencing Dominion: Culture, Identity, and Power in the British Mediterranean*. Indiana: U of Notre Dame P, 2002. Print.
- "Ionian Islands." *Times* [London, England] 9 Nov. 1821: 3. *The Times Digital Archive*. Web. 17 Oct. 2015.
- Jervis, Henry Jervis-White. *The Ionian Islands during the Present Century*. London: Chapman & Hall, 1863. PDF file.
- Kennard, Nina H. *Lafcadio Hearn*. London: Eveleigh Nash, 1911. PDF file.
- Kneeland, Henry Tracy. "An interview with James Danial Hearn - Lafcadio Hearn's Brother." *Atlantic Monthly*, January 1923: 20-27. Web. September 10, 2015.
- "The Late Lafcadio Hearn," *The Bookman*, November 1904: 190-91. PDF file.
- Paschalidi, Maria. "Constructing Ionian Identities: The Ionian Islands in British Official Discourses: 1815-1864." Diss. University College London, 2009. PDF file.